

原文（文繁本）	邱永漢訳（一）
<p>卻說美猴王榮歸故里，自剿了混世魔王，奪了一口大刀，逐日操演武藝，教小猴砍竹為標，削木為刀，治旗幡，打哨子，一進一退，安營下寨，頑耍多時。</p>	<p>さて、混世魔王を平らげると、孫悟空は急に自分の腕に自信が出てきた。戦利品の大刀を肌身離さず、日夜、剣術の猛練習である。それだけではまだ足りないと見えて、小猿にそれぞれ木刀をもたせ、幟を作らせたり、歩哨台を置かせたり、とにかく、一大軍国の体裁を整えはじめた。</p>
<p>忽然靜坐處，思想道：</p>	<p>「しかし」と悟空は考えた。</p>
<p>「我等在此，恐作要成真，或驚動人王，或有禽王、獸王認此犯頭，說我們操兵造反，興師來相殺，汝等都是竹竿木刀，如何對敵？須得鋒利劍戟方可。如今奈何？」</p>	<p>「形だけができたところで、これではハリコの虎のようなものだ。竹槍や木刀ではとても外敵を防ぎきれものではない」</p>
<p>眾猴聞說，個個驚恐道：「大王所見甚長，只是無處可取。」</p>	
<p>正說間，轉上四個老猴，兩個是赤尻馬猴，兩個是通背猿猴，走在面前道：「大王，若要冶鋒利器械，甚是容易。」</p>	<p>「いい考えがありますよ」と家老をつとめる赤尻猿猴がいった。</p>
<p>悟空道：「怎見容易？」</p>	
	<p>「我々が持っていなければ、持っている者をさがせば宜しいではありませんか」「なるほど、お前はなかなか猿知恵があるぞ」と悟空は頷いた。「ところで、どこへ行けば、武器を持ってる者がいるだろうか？」</p>
<p>四猴道：「我們這山向東去，有二百里水面，那廂乃傲來國界。那國界中有一王位，滿城中軍民無數，必有金銀銅鐵等匠作。大王若去那裡，或買或造些兵器，教演我等，守護山場，誠所謂保泰長久之機也。」</p>	<p>「ここから海を渡って東へ行くことおよそ二百里、そこに傲来国の国境があります。傲来国は大国ですから、きっと鍛冶屋がたくさんいるでしょう。大王ご自身がおいでになって、買うなり、注文するなりすれば、思うような武器が手に入ると思います」</p>
<p>悟空聞說，滿心歡喜道：「汝等在此頑耍，待我去來。」</p>	<p>「よしよし、俺が一走りして来るから、お前たちはちょっと待っている」</p>
<p>好猴王，急縱筋斗雲，霎時間過了二百里水面。</p>	<p>悟空はすぐさま筋斗雲に乗ると、忽ち二百里の海を渡って</p>
<p>果見那廂有座城池，六街三市，萬戶千門，來來往往，人都在光天化日之下。</p>	<p>傲来国の国境へ入った。噂に違わぬ大きな城市で、王宮を中心に四方八方へ道が走り、その道沿いに民家が軒を並べ、市場は黒山のような人だかりである。</p>

<p>悟空心中想道：「這裡定有現成的兵器，我待下去買他幾件，還不如使個神通覓他幾件倒好。」</p>	<p>「こんなところなら、きっと出来合いの武器が揃っているに違いない。値段の交渉をするよりも、只で失敬する方が簡単だ」</p>
<p>他就捻起訣來，念動咒語，向巽地上吸一口氣，呼的吹將去，便是一陣風，飛沙走石，好驚人也：</p>	<p>彼は口に呪文を唱え、胸一杯に空気を吸い込んで、プーッと吹き出すと、忽ち一陣の狂風になって大砂塵が巻き起った。</p>
<p>炮雲起處蕩乾坤，黑霧陰霾大地昏。江海波翻魚蟹怕，山林樹折虎狼奔。諸般買賣無商旅，各樣生涯不見人。殿上君王歸內院，階前文武轉衙門。千秋寶座都吹倒，五鳳高樓幌動根。</p>	
<p>風起處，驚散了那傲來國君王，三街六市，都慌得關門閉戶，無人敢走。</p>	<p>人々はあわてて家へ駆け込み、戸という戸を皆閉めてしまった。</p>
<p>悟空才按下雲頭，徑闖入朝門裡，直尋到兵器館、武庫中，打開門扇看時，那裡面無數器械：刀、槍、劍、戟、斧、鉞、毛、鎌、鞭、鈹、槌、簡、弓、弩、叉、矛，件件俱備。</p>	<p>悟空は上空から地形を偵察し、真直ぐ王宮の武器庫へ向って跳びおりて行く。扉をこじあけて中へ踏み込むと、数えきれないほどの武器の山——刀劍、槍、戟、斧、鎌、鞭、弓、矢、何ひとつないものはない。</p>
	<p>「人間という奴はいつもこうだ。口では平和の共存のと念仏を唱えているが、一皮むけばごらんの通りじゃないか。それよりは俺たちのように適者生存を看板にするほうがまだ正直だ」</p>
<p>一見甚喜道：「我一人能拿幾何？還使個分身法搬將去罷。」</p>	
<p>好猴王，即拔一把毫毛，入口嚼爛，噴將出去，念動咒語，叫聲：「變！」變做千百個小猴，都亂搬亂搶，有力的拿五七件，力小的拿三二件，盡數搬個罄淨。</p>	<p>身体の毛を一握りほどむしりとると、彼は口でかみくだいて、プッと吹いた。「変れ」毛は忽ち幾千百の小猿に変じ、我先にと武器を奪い合う。力の強い者は五つ六つ、力の弱い者は二つ三つ、それぞれ持てるだけ持って兵器庫の外へ出た。</p>
<p>徑踏雲頭，弄個攝法，喚轉狂風，帶領小猴，俱回本處。</p>	<p>悟空は、雲に乗ると再び一陣の狂風を呼び、猿ごと風に乗せて、花果山へと引きあげて行った。</p>
<p>卻說那花果山大小猴兒，正在那洞門外頑耍，忽聽得風聲響處，見半空中丫丫叉叉，無邊無岸的猴精，說得都亂跑亂躲。少時，美猴王按落雲頭，收了雲霧，將身一抖，收了毫毛，</p>	

<p>將兵器都亂堆在山前，叫道：「小的們，都來領兵器。」</p>	<p>「さあ、武器が到着したぞ」 広場に山と積まれた武器を背にして、猿王は得意げに叫んだのである。</p>
<p>眾猴看時，只見悟空獨立在平陽之地，俱跑來叩頭問故。悟空將前使狂風、搬兵器，一應事說了一遍。眾猴稱謝畢，都去搶刀奪劍，搥斧爭槍，扯弓扳弩，吆吆喝喝，耍了一日。次日，依舊排營。</p>	
<p>悟空會聚群猴，計有四萬七千餘口。</p>	<p>こうして、猿王国の軍国主義は始まった。徴兵制度を施行し、更に諸国からナラズ者の猿をかき集め、総兵力は四万七千——実力もさることながら世は宣伝戦の時代だからもちろん、公称百万の大軍である。</p>
<p>早驚動滿山怪獸，都是些狼、蟲、虎、豹、麋、麂、獐、狃、狐、狸、獾、貉、獅、象、狻猊、猩猩、熊、鹿、野豕、山牛、羚羊、青兕、狡兔、神獒……各樣妖王，共有七十二洞，都來參拜猴王為尊。每年獻貢，四時點卯。也有隨班操演的，也有隨節徵糧的。齊齊整整，把一座花果山造得似鐵桶金城。各路妖王，又有進金鼓、進彩旗、進盔甲的，紛紛攘攘，日逐家習舞興師。</p>	<p>勢を得ればその威ますます四隣に轟き、遂に狼も虎も狐も狸もことごとくその威に服し、植民地の数はおよそ七十二、参観交代、朝貢の山、花果山は鉄城金閣と化して、毎日毎日「下へ下へ」と大名行列の後が絶えた日とてない。</p>
<p>美猴王正喜間，忽對眾說道：「汝等弓弩熟諳，兵器精通，奈我這口刀著實榔棗，不遂我意，奈何？」</p>	<p>或る日、猿王がいった。「これでどうやらわが国も基礎が固まってきたが、どうにも我慢がならないのは、俺のこの刀だ。バカでっかいばかりで、さっぱり使いものにならない」</p>
<p>四老猴上前啟奏道：「大王乃是仙聖，凡兵是不堪用。但不知大王水裡可能去得？」</p>	<p>家老をつとめる四匹の猿が恭しく御前に跪いて言うには、「大王はわれわれ俗物と違って、神聖なお方でございますから、俗物の使うような武器では御意に叶いますまい。これと思う武器があることはありますが、それとりに行けるかどうか問題です」「それはどこにある？」と猿王は身体をのり出した。「大王は水の中に入ることができますでしょうか？」と例の赤尻猿がきいた。</p>

<p>悟空道：「我自聞道之後，有七十二般地煞變化之功，筋斗雲有莫大的神通；善能隱身遯身，起法攝法。上天有路，入地有門；步日月無影，入金石無礙；水不能溺，火不能焚。那些兒去不得？」</p>	<p>「そんなことはわけはないさ。俺は天に昇ることもできれば、地にもぐることもできる。太陽や月の世界を散歩することもできれば、金属や石の中にもぐり込むこともできる。まして水に入ったり、火にとび込んだりするぐらいのことは朝飯前だ」</p>
<p>四猴道：「大王既有此神通，我們這鐵板橋下，水通東海龍宮。大王若肯下去，尋著老龍王，問他要件甚麼兵器，卻不趁心？」</p>	<p>「それなら、この鉄橋の下の水は東海竜宮に通じています。もし大王がおいでになる気があれば、そこにはきっと素晴らしい武器がありましょう」</p>
<p>悟空聞言，甚喜道：「等我去來。」</p>	<p>「なるほど。ではちょっと竜王のところへ挨拶に行ってくるか」</p>
<p>好猴王，跳至橋頭，使一個閉水法，捻著訣，撲的鑽入波中，分開水路，徑入東洋海底。</p>	<p>孫悟空は橋のそばまで来ると、早速、閉水法を使い、逆巻く流れの中にとび込んだ。水は自ら路を開き、程なく東洋大海の水域へと入って行った。</p>
<p>正行間，忽見一個巡海的夜叉，擋住問道：「那推水來的，是何神聖？說個明白，好通報迎接。」</p>	<p>「もしもし、そこをお通りのお方！」 声のする方を見ると、海中を巡回中の夜叉である。「あなたはどこのどなたですか？」</p>
<p>悟空道：「吾乃花果山天生聖人孫悟空，是你老龍王的緊鄰，為何不識？」</p>	<p>「拙者のことか」と孫悟空はことさらに横柄な態度で答えた。「拙者はこの上の花果山に住む孫悟空という仙人だ。お前んとこの竜王と隣り合わせだというのに、ご存じないと見えるな？」 「これはこれはお見それ致しました。しばらくの間、お待ち下さい」</p>
<p>那夜叉聽說，急轉水晶宮傳報道：</p>	<p>夜叉が水晶宮に報告に帰ると、</p>
<p>「大王，外面有個花果山天生聖人孫悟空，口稱是大王緊鄰，將到宮也。」</p>	
<p>東海龍王敖廣即忙起身，與龍子、龍孫、蝦兵、蟹將出宮迎道：</p>	<p>東海竜王は竜子、竜孫及び儀仗兵の面々を従えて、宮門まで迎えに出て来た。</p>
<p>「上仙請進，請進。」</p>	<p>「ようこそおいで下さいました。さあ、どうぞお入り下さい」</p>
<p>直至宮裡相見，上坐獻茶畢，問道：</p>	<p>御殿へ通されて、型通りお茶が出ると、竜王がきいた。</p>
<p>「上仙幾時得道？授何仙術？」</p>	<p>「今日、わざわざお越しいただいたのは、何か特別のご用事でもおありなのでしょうか？」</p>

<p>悟空道：「我自生身之後，出家修行，得一個無生無滅之體。近因教演兒孫，守護山洞，奈何沒件兵器。久聞賢鄰享樂瑤宮貝闕，必有多餘神器，特來告求一件。」</p>	<p>「実は私の国では目下、国をあげて自衛隊の充実に努力している最中なのですが、如何せん、新兵器がございません。話によると、貴国には素晴らしい武器が多々あるよし、ひとつ近隣の誼みをもって、一つで宜しいから、これと思うものを分けていただけませんか」</p>
<p>龍王見説，不好推辭，即著鱖都司取出一把大桿刀奉上。</p>	<p>そういわれると、竜王も断りかねて、部下に命じて大きな刀を一ふりもって来させた。</p>
<p>悟空道：「老孫不會使刀，乞另賜一件。」</p>	<p>「刀なら私のところにもあります」と悟空はいった。「何か人をあつといわせるような新兵器はありませんか？」</p>
<p>龍王又著鮑太尉領鱧力士，擡出一桿九股叉來。</p>	<p>そこで竜王はまた部下に命じて、九股叉という先が九本に分れた大槍をもって来させた。</p>
<p>悟空跳下來，接在手中，使了一路，放下道：「輕，輕，輕，又不趁手。再乞另賜一件。」</p>	<p>悟空はそれを手にとって、ちょっと振って見たが、すぐ下において、「どうもあまり軽すぎます。また別のものを出して見せて下さい」</p>
<p>龍王笑道：「上仙，你不看看，這叉有三千六百斤重哩。」</p>	<p>「ご冗談を！」と竜王は笑った。「こう見えても、この槍は三千六百斤の重さがありますよ」</p>
<p>悟空道：「不趁手，不趁手。」</p>	<p>「いやいや、さっぱり手応えがありません」</p>
<p>龍王心中恐懼，又著鯁提督、鯉總兵擡出一柄畫桿方天戟。</p>	<p>竜王は内心びっくりしながら、また部下を動員して、とてつもなく大きな戟をもって来させた。</p>
<p>那戟有七千二百斤重。</p>	<p>この戟の重さは七千二百斤もあるのに、</p>
<p>悟空見了，跑近前，接在手中，丟幾個架子，撒兩個解數，插在中間道：</p>	<p>孫悟空は手にもって、グルグルまわすと、床の上に突きさして、</p>
<p>「也還輕，輕，輕。」</p>	<p>「まだ軽い、軽すぎる！」</p>
<p>老龍王一發害怕道：「上仙，我宮中只有這根戟重，再沒甚麼兵器了。」</p>	<p>さすがの竜王も度胆を抜かれて、「これ以上、重い兵器は私どものところにはもうございません」</p>
<p>悟空笑道：「古人云：『愁海龍王沒寶』哩！你再去尋尋看，若有可意的，一一奉價。」</p>	<p>「そうだろうか？」と悟空は薄気味の悪い笑いを浮かべながら、「昔から、珍しいものなら海竜王に聞け、というじゃありませんか。もう一度、蔵の中を探して見て下さい」</p>
<p>龍王道：「委的再無。」正說處，後面閃過龍婆、龍女道：</p>	<p>「いや、本当にないんですよ」竜王が困惑しているところへ、奥方と娘がやって来て、</p>
<p>「大王，觀看此聖，決非小可。我們這海藏中，那一塊天河定底的神珍鐵，這幾日霞光艷艷，瑞氣騰騰，敢莫是該出現，遇此聖也？」</p>	<p>「ね、海の底に沈んでいるあの鉄の棒はどうかしら。この数日来、どうしたわけか知りませんが、ピカピカ光り出したんですよ」</p>

龍王道：「那是大禹治水之時，定江海淺深的一個定子，是一塊神鐵，能中何用？」	「あれは、お前」と竜王が言葉を返した。「むかし禹が治水工事をやった時に、海を鎮めるためにおろしたものだよ。役に立つ代物じゃなからう」
龍婆道：「莫管他用不用，且送與他，憑他怎麼改造，送出宮門便了。」	「役に立とうが立つまいが、知ったことですか。あれをあのサルにあげればいいわよ」
老龍王依言，盡向悟空說了。	その通り竜王が説明をすると、
悟空道：「拿出來我看。」	「じゃそれを出して見せて下さい」と悟空は答えた。
龍王搖手道：「扛不動，擡不動，須上仙親去看看。」	「とんでもない」と竜王は手をふりながら、「とてもわれわれでは動かせません。ひとつご自分で見に行ってください」
悟空道：「在何處？你引我去。」	「じゃ現場へ私を案内して下さい」
龍王果引導至海藏中間，忽見金光萬道。	一同連れ立って海底の蔵の中へ入ると、暗闇の中から金色燦然と光を放っているものがある。
龍王指定道：「那放光的便是。」	「あれですよ」と竜王がいった。
悟空撩衣上前，摸了一把，乃是一根鐵柱子，約有斗來粗，二丈有餘長。他儘力兩手搵過道：	悟空は腕まくりをしてそばへ近づき、手をのばすと、一本の鉄の棒である。丸太棒ほどの太さで、長さは約二丈余り。両手で抱えるようにして転がしながら、
「忒粗忒長些，再短細些方可用。」	「太すぎるし、長すぎるし、もう少し小さくなれば、使いやすいんだがなあ」
說畢，那寶貝就短了幾尺，細了一圍。	そういい終るか終らぬかのうちに、くだんの鉄の棒は忽ち数尺縮み、周囲も一まわりほど細くなった。
悟空又顛一顛道：「再細些更好。」	「おやおや、もう少し小さくなると、もっと都合がいいぞ」
那寶貝真個又細了幾分。	すると、棒はまたしても小さくなった。
悟空十分歡喜，拿出海藏看時，原來兩頭是兩個金箍，中間乃一段烏鐵。緊挨箍有鐫成的一行字，喚做：「如意金箍棒，重一萬三千五百斤。」	悟空はすっかり喜んで蔵の中から取り出して見ると、ちょうど、ボディ・ビルに使う鉄棒のように両端が丸い球になっている。そこに「如意金箍棒」と銘が打ってあって、「重量一万三千五百斤」と刻んである。
心中暗喜道：「想必這寶貝如人意。」一邊走，一邊心思口念，手顛著道：「再短細些更妙。」拿出外面，只有二丈長短，碗口粗細。	「これはきっと、伸縮自在の武器に違いない」そう思いながら、「もう少し小さくなれ」というと、鉄の棒はさらに縮んで、長さ二丈、直径三寸ぐらいの大きさになった。
你看他弄神通，丟開解數，打轉水晶宮裡。	さて、如意棒を手を持って、前に数歩、後に数歩、風車でも廻すような勢いで回転させながら、孫悟空は真つすぐ水晶宮に戻った。
說得老龍王膽戰心驚，小龍子魂飛魄散，龜鱉鼉鼉皆縮頸，魚蝦蟹蟹盡藏頭。	その凶暴な姿を見ると竜宮中のものは皆色を失ってしまった。

悟空將寶貝執在手中，坐在水晶宮殿上，對龍王道：「多謝賢鄰厚意。」	悟空は如意棒を手に握ったまま、水晶宮の中にデンと坐り込み、「素晴らしい贈り物をまことにかたじけない」と軽く頭をさげた。
龍王道：「不敢，不敢。」	「どう致しまして」と龍王が苦笑をすると、
悟空道：「這塊鐵雖然好用，還有一說。」	「ついでにもう一つお願いがあります」
龍王道：「上仙還有甚說？」	「どういうことでございますか？」
悟空道：「當時若無此鐵，倒也罷了；如今手中既拿著他，身上更無衣服相趁，奈何？你這裡若有披掛，索性送我一副，一總奉謝。」	「この鉄棒がなかった時はそうも思わなかったが、これを手に持って見ると、まさか鎧なしというわけにも行きませぬ。無心ついでにひとつ鎧兜を一揃いお贈りいただけますか」
龍王道：「這個卻是沒有。」	「残念ながら鎧はありません」
悟空道：「一客不煩二主。若沒有，我也定不出此門。」	「なければ、あるまでここを動かぬことに致しましょう」と悟空は居直った。
龍王道：「煩上仙再轉一海，或者有之。」	「まあ、そうおっしゃらずにほかの海へ行って見て下さい。ほかの海なら或いはあるかも知れませんから」
悟空又道：「走三家不如坐一家。千萬告求一件。」	「その手にはのらないよ」と悟空は笑った。「三軒の家に無駄足を運ぶより一軒の家でねばる方がよい、といひますからね」
龍王道：「委的沒有，如有即當奉承。」	「でも本当にはないのです。あればもちろん、出し惜しみはしません」
悟空道：「真個沒有？就和你試試此鐵！」	「本当にはないか？ 本当になけりゃ、ひとつこの棒で試して見ようか？」 悟空が立ちかけると、
龍王慌了道：「上仙，切莫動手，切莫動手，待我看舍弟處可有，當送一副。」	龍王はあわてふためいて、「待って下さい。待って下さい。弟のところにあるかも知れませんから、きいて見ます」
悟空道：「令弟何在？」	「弟さんはどこにいます？」
龍王道：「舍弟乃南海龍王敖欽、北海龍王敖順、西海龍王敖閏是也。」	「私の弟は南海龍王、北海龍王、西海龍王の三人です」
悟空道：「我老孫不去，不去。俗語謂『賒三不敵見二』，只望你隨高就低的送一副便了。」	「そんな遠くまで行くのはご免だ。あちこち借金ができちゃ世間が狭くなるばかりだからな」
老龍道：「不須上仙去。我這裡有一面鐵鼓、一口金鐘，凡有緊急事，搗得鼓響，撞得鐘鳴，舍弟們就頃刻而至。」	「あなたがおいでにならなくとも大丈夫です。私のところに鉄の太鼓と金の鐘があって、あれを打ち鳴らせば、すぐ駆けつけてくれることになっています」
悟空道：「既是如此，快些去搗鼓撞鐘。」	「それじゃ早速合図をして呼んで来給え」

真個那鼉將便去撞鐘，驚帥即來擂鼓。	やむを得ないので、竜王は太鼓と鐘を打たせた。
少時，鐘鼓響處，果然驚動那三海龍王，須臾來到，一齊在外面會著。	と、間髪を入れずして三人の竜王が水晶宮の門前に現われた。
敖欽道：「大哥，有甚緊事，擂鼓撞鐘？」	「兄さん、どうしたのですか」と南海竜王がきいた。
老龍道：「賢弟，不好說。有一個花果山甚麼天生聖人，早間來認我做鄰居。後要求一件兵器，獻鋼叉嫌小，奉畫戟嫌輕；將一塊天河定底神珍鐵，自己拿出手，丟了些解數。如今坐在宮中，又要索甚麼披掛。我處無有，故響鐘鳴鼓，請賢弟來。你們可有甚麼披掛，送他一副，打發出門去罷了。」	「俺のところへユスリがやって来ているんだ。鎧兜を一揃いよこせといって宮殿の中に坐り込んでいるんだが、生憎とうちにはそんなものはないし、それでお前たちを呼んだんだが、誰か持っているのがあったら、出してやってくれないか」
敖欽聞言，大怒道：「我兄弟們點起兵拿他不是？」	「バカな！」と南海竜王が青筋を立てて怒鳴った。「兄弟が四人もいて、だまってユスられるという手があるものか」
老龍道：「莫說拿，莫說拿。那塊鐵，挽著些兒就死，磕著些兒就亡；挨挨兒皮破，擦擦兒舂傷。」	「シーッ」と老竜王が制した。「あの鉄棒をまともにくらったら、一ぺんでおさらばだ。ちょっと身体にふれても、三カ月の重傷は間違いなしだよ」
西海龍王敖閏說：「二哥不可與他動手。且只湊副披掛與他，打發他出了門，啟表奏上上天，天自誅也。」	「生命知らずとは喧嘩をしない方が賢いぜ」と西海竜王がいった。「ひとまず相手の欲しいものを作って、ここから追い出すことだ。それから玉皇上帝のところへ訴えて出ればよいじゃないか」
北海龍王敖順道：「說的是。我這裡有一雙藕絲步雲履哩。」	「そうだ。その方がいい」と北海竜王が相槌を打った。「ちょうど僕のところに履が一足ある」
西海龍王敖閏道：「我帶了一副鎖子黃金甲哩。」	「僕は鎧を持って来た」
南海龍王敖欽道：「我有一頂鳳翅紫金冠哩。」	「じゃ僕は兜を出すでしょう」
老龍大喜，引入水晶宮相見了，以此奉上。	東海竜王がそれらを持って宮殿に帰ると、

<p>悟空將金冠、金甲、雲履都穿戴停當，使動如意棒，一路打出去，對眾龍道：「聒噪，聒噪。」</p>	<p>孫悟空は眼尻に皺を寄せて喜び早速身体につけて見た。まるで彼のために作られたもののように身体にぴったりである。完全武装をして手に如意棒を持ちあげると、「いや、どうもお騒がせ致しました」と一言、居並ぶ群衆を尻眼に彼は悠々と宮殿からひきあげて行ったのである。</p>
<p>四海龍王甚是不平，一邊商議進表上奏不題。</p>	
<p>你看這猴王，分開水道，徑回鐵板橋頭，攔將上去。</p>	<p>さて、もと来た水路をもどって、河をさかのぼると、水簾洞の鉄橋の下である。悟空は水の中から一跳びに橋の上にとびあがった。</p>
<p>只見四個老猴領著眾猴，都在橋邊等候。忽然見悟空跳出波外，身上更無一點水濕，金燦燦的走上橋來。</p>	
<p>誑得眾猴一齊跪下道：「大王好華彩耶！好華彩耶！」</p>	<p>「お見事、お見事」 「三国一のいい男！」</p>
<p>悟空滿面春風，高登寶座，將鐵棒豎在當中。那些猴不知好歹，都來拿那寶貝，卻便似蜻蜓撼鐵樹，分毫也不能禁動。</p>	<p>猿どもがはやし立てる中を、目もさめるような美しい甲冑に身をかためた猿王は歩いて行く。その小面憎いまでの華やかさ、得意さ。やがて王座にもどると、孫悟空は鉄棒を皆の目の前につたてた。猿どもがまわりに集まって、手にとって見ようとするが、まるで根が生えたようにびくともしない。</p>
<p>一個個咬指伸舌道：「爺爺呀！這般重，虧你怎的拿來也！」</p>	
<p>悟空近前，舒開手，一把撈起，對眾笑道：「物各有主。這寶貝鎮於海藏中，也不知幾千百年，可的今歲放光。龍王只認做是塊黑鐵，又喚做天河鎮底神針。那廝每都扛擡不動，請我親去拿之。那時此寶有二丈多長，斗來粗細。被我撈他一把，意思嫌大，他就小了許多；再教小些，他又小了許多；再教小些，他又小了許多。急對天光看處，上有一行字，乃『如意金箍棒，一萬三千五百斤』。</p>	<p>「お前たちに持てるわけがないよ」と悟空は笑いながら、いとも軽々と手元にひきよせ、「この銘を見る、一万三千五百斤と書いてあるだろう。竜王さえ手に負えなかった代物だ。物にはそれぞれ持主があるとはよくいったものだ」</p>
<p>你都站開，等我再叫他變一變著。」</p>	
<p>他將那寶貝顛在手中，叫：「小！小！小！」</p>	<p>そして、口の中で、「小さくなれ、小さくなれ」と唱える</p>

<p>即時就小做一個繡花針兒相似，可以摠在耳朵裡面藏下。</p>	<p>鉄棒は見る見る小さくなって、遂に縫針ほどの可愛らしい棒になってしまった。悟空はそれを指でつまみあげると、耳の中に蔵い込んでしまったのである。</p>
<p>眾猴駭然，叫道：「大王，還拿出來耍耍。」</p>	<p>あまりの不思議さに猿どもは呆気にとられていたが、やがてキャッキョと騒ぎ出した。「大王、もう一度出して見せて下さい」</p>
<p>猴王真個去耳朵裡拿出，托放掌上叫：「大！大！大！」即又大做斗來粗細，二丈長短。</p>	<p>いわれるままに、猿王はまた耳の中から取り出して、掌上におくと、「大きくなれ、大きくなれ」と叫んだ。すると、棒はだんだん大きくなって、間もなく二丈ほどの長さになった。</p>
<p>他弄到歡喜處，跳上橋，走出洞外，將寶貝摠在手中，使一個法天像地的神通，把腰一躬，叫聲：「長！」</p>	<p>さすがの孫悟空も喜びをかくし切れず、棒をもったまま洞をとび出した。広場へ出ると、片手に棒を握り、口に呪文を唱え、「のびよ」と叫ぶや、</p>
<p>他就長的高萬丈，頭如泰山，腰如峻嶺，眼如閃電，口似血盆，牙如劍戟；手中那棒，上抵三十三天，下至十八層地獄。把些虎豹狼蟲、滿山群怪、七十二洞妖王，都說得磕頭禮拜，戰兢兢魄散魂飛。</p>	<p>自分の背がニョキニョキとのび出した。見よ。頭は泰山の如く、腰は峻嶺の如く、眼は稲妻の如く、口は血を盛った盆の如く、歯は剣山の如く、手に握ったかの如意棒は、上は三十三天に達し、下は十八地獄に至り、満山の群怪、七十二洞の洞主ことごとく頭を地にすりつけて、生きた心地もしない。</p>
<p>霎時收了法像，將寶貝還變做個繡花針兒，藏在耳內，復歸洞府。</p>	<p>やがて法術をといて縫針を耳の中におさめると、四尺足らないこの猿奴、天を仰いで、「カンラ、カンラ」と高笑い。</p>
<p>慌得那各洞妖王，都來參賀。此時遂大開旗鼓，響振銅鑼，廣設珍饈百味，滿斟椰液萄漿，與眾飲宴多時，卻又依前教演。</p>	<p>それが森という森、山という山に響きわたって、四方八方から呼応して来るのは銅鑼や太鼓の音。諸洞の主が猿王の大成功を祝して、次から次へとお祝いの品を届けてくる行列また行列。むかしは諸物資豊富だったから、カクテル・パーティなどとケチなことはやらない。山海の珍味が食卓を埋め、椰子のジュースに葡萄の美酒。飲めよ、歌えよ、と夜を日につぐ大宴会である。</p>
<p>猴王將那四個老猴封為健將，將兩個赤尻馬猴喚做馬流二元帥，兩個通背猿猴喚做崩芭二將軍。將那安營下寨、賞罰諸事，都付與四健將維持。</p>	<p>かくて軍国の基礎はますます固く、強兵尚武の風はいよいよ盛んになり、大臣も今や元帥大将の兼職、すべて兵隊の位になおさねば、世間の評価ができなくなってしまうた。</p>
<p>他放下心，日逐騰雲駕霧，遨遊四海，行樂千山。施武藝，遍訪英豪；弄神通，廣</p>	<p>そして、当の猿王はすっかり安心して、毎日、雲に乗ったり、霧に乗ったり、世界をまたにもっぱら外交攻勢、他</p>

<p>交賢友。此時又會了個七弟兄，乃牛魔王、蛟魔王、鵬魔王、獅狒王、獼猴王、猓狻王，連自家美猴王七個。</p>	<p>国のボスたちと兄弟の交わり、牛魔王、蛟魔王、鵬魔王、獅駝王、猴王、王と併せて、七人の義兄弟が出来上った。</p>
<p>日逐講文論武，走斝傳觴，絃歌吹舞，朝去暮回，無般兒不樂。把那萬里之遙，只當庭闈之路；所謂點頭徑過三千里，扭腰八百有餘程。</p>	<p>今や万里の外もさながらわが家の庭園で、おじぎをする間に三千里、腰をひねる間に、八百里というスピード時代になったのである。</p>
<p>一日，在本洞吩咐四健將安排筵宴，請六王赴飲，殺牛宰馬，祭天享地，著眾怪跳舞歡歌，俱吃得酩酊大醉。送六王出去，卻又賞擲大小頭目。敲在鐵板橋邊松陰之下，霎時間睡著。四健將領眾圍護，不敢高聲。</p>	<p>成る日、いつもの調子で大宴会を開き、六人の義兄弟を招待した猿王は、国を挙げて至れり尽せりの大歓待をしたが、宴会も終りに近づくと、酒と氣疲れでさすがにクタクタになり、国賓を無事送り出した途端に、松の木陰でうとうとしはじめた。</p>
<p>只見那美猴王睡裡，見兩人拿一張批文，上有「孫悟空」三字，走近身，不容分說，套上繩，就把美猴王的魂靈兒索了去，踉踉跄跄，直帶到一座城邊。</p>	<p>すると、突然、彼の眼前に二人の獄吏が手に「孫悟空」と書いた逮捕状を持って現われた。彼らは有無をいわさず、孫悟空の身体に縄をかける「さあ、来い」と孫悟空をひき立てる。酒が全身にまわっているので、抵抗しようにも足元がふらつき、あちらにふらふら、こちらにふらふら、よろめきながらも、あとについて行くよりほかない。</p>
<p>猴王漸覺酒醒，忽擡頭觀看，那城上有一鐵牌，牌上有三個大字，乃「幽冥界」。</p>	<p>そのうちに次第に酔いがさめて来て、ふと見あげると、すぐ目と鼻の先に城門が聳え、「幽冥界」と鉄の看板が立っている。</p>
<p>美猴王頓然醒悟道：「幽冥界乃閻王所居，何為到此？」</p>	<p>驚きのあまり、今までの酔いが一ぺんにどこかへふっとんでしまった。「幽冥界といえば閻魔大王の居城じゃないか。何のために俺をここへ引き立てて来た？」</p>
<p>那兩人道：「你今陽壽該終，我兩人領批，勾你來也。」</p>	<p>「あなたの寿命がつかたのです」と獄吏が答えた。</p>
<p>猴王聽說，道：「我老孫超出三界之外，不在五行之中，已不伏他管轄，怎麼朦朧，又敢來勾我？」</p>	<p>それをきいた途端に悟空は思わずカッとなった。「俺様を知らないか！」と彼は凄まじい血相をしながら、「俺様は過去現在未来の三界を超越し、輪廻の運命のそとに遊ぶ神仙だぞ。人を見てから縄をかけろ」</p>
<p>那兩個勾死人，只管扯扯拉拉，定要拖他進去。</p>	

<p>這猴王惱起性來，耳朵中掣出寶貝，幌一幌，碗來粗細。</p>	<p>いうなり、耳の中から如意棒を抜き出して、グルリとまわすと、棒は見る見る大きくなった。</p>
<p>略舉手，把兩個勾死人打為肉醬。</p>	<p>それを持ちあげて、軽く二人の頭をこづいた。可哀そうに二人の獄吏は立ちどころにのし餅である。</p>
<p>自解其索，丟開手，掄著棒，打入城中。</p>	<p>自らの縄を解き、両手を大の字に開いた悟空は片手で如意棒をプロペラのように回転させながら城の中へ乗りこんで行った。</p>
<p>誑得那牛頭鬼東躲西藏，馬面鬼南奔北跑。眾鬼卒奔上森羅殿，報著：「大王，禍事！禍事！外面有一個毛臉雷公打將來了。」</p>	<p>閻魔の部下たちもこの見慣れぬ怪物を見ると、腰を抜き、ほうほうの体で森羅殿に駆け込むなり、「大へんだ。大へんだ。雷の来襲だ」</p>
<p>慌得那十代冥王急整衣來看，見他相貌兇惡，即排下班次，應聲高叫道：「上仙留名！上仙留名！」</p>	<p>森羅殿に住む十代冥王は前代未聞の大事件にあわてふためき、とるものもとりあえず、外へとび出して見ると、なるほど雷にも劣らぬ凶悪漢が立ちはだかっている。十人の冥王は右へならえの一行を作って、「ついぞお見かけしたことのないお方ですが、どなたさまでございましょうか？」</p>
<p>猴王道：「你既認不得我，怎麼差人來勾我？」</p>	<p>「俺の名前も知らないで、どうして俺を捕えに来た。人権蹂躪も甚だしいぞ」</p>
<p>十王道：「不敢，不敢。想是差人差了。」</p>	<p>「それは、それは」と冥王たちは互いに顔を見合わせながら、「きっと獄吏が間違いをしでかしたのだと思います」</p>
<p>猴王道：「我本是花果山水簾洞天生聖人孫悟空。你等是甚麼官位？」</p>	<p>「俺は花果山水簾洞のあるじ、孫悟空だ。貴様らは一体何ものだ？」</p>
<p>十王躬身道：「我等是陰間天子十代冥王。」</p>	<p>「私どもは陰間を司る十代冥王でございます」</p>
<p>悟空道：「快報名來，免打。」十王道：「我等是秦廣王、初江王、宋帝王、忤官王、閻羅王、平等王、泰山王、都市王、卞城王、轉輪王。」</p>	
<p>悟空道：「汝等既登王位，乃靈顯感應之類，為何不知好歹？我老孫修了仙道，與天齊壽，超昇三界之外，跳出五行之中，為何著人拘我？」</p>	<p>「王と名がついているからには、貴殿らも物の道理がわからん奴らではあるまい。この孫悟空と俗物の区別もつかんとは何ごとだ！」</p>
<p>十王道：「上仙息怒。普天下同名同姓者多，敢是那勾死人錯走了也？」</p>	<p>「どうかひらにご容赦下さい。ご存じの通り、世の中には同姓同名のものがたくさんいますので、獄吏が間違えたのだと思います」</p>

悟空道：「胡說！胡說！常言道：『官差吏差，來人不差。』你快取生死簿子來看！」	「莫迦も休み休みに言い給え、むかしから間違いを起すのは役人で、下ッ端に罪はないというじゃないか。さあ、生死簿を持って来て見せろ」
十王聞言，即請上殿查看。	
悟空執著如意棒，徑登森羅殿上，正中間南面坐下。	手に如意棒を持ったまま森羅殿に上った悟空は上座にどっかとおろした。
十王即命掌案的判官取出文簿來查。那判官不敢怠慢，便到司房裡捧出五六簿文書並十類簿子。	十人の王は書記に命じて、早速、山のような書類をもって来させた。
逐一查看：羸蟲、毛蟲、羽蟲、昆蟲、鱗介之屬，俱無他名。	一冊一冊めくって見るが、毛虫や羽虫や昆虫や鱗介の類には彼の名前が見当たらない。
又看到猴屬之類，原來這猴似人相，不入人名；似羸蟲，不居國界；似走獸，不伏麒麟管；似飛禽，不受鳳凰轄。另有個簿子，悟空親自檢閱，直到那「魂」字一千三百五十號上，方注著孫悟空名字，乃「天產石猴，該壽三百四十二歲，善終」。	やっと猿猴類の名簿が出て来た。その部厚い書類をめくって行くと、一三五〇号のナンバーに「孫悟空 —— 天生の石猿、寿命三百四十二歳」と書かれている。
	「畜生奴！」と孫悟空は舌打ちをした。「いくらこの俺が人間離れをしているといっても、人間の中に入っていないとは！」
悟空道：「我也不記壽數幾何，且只消了名字便罷。取筆過來。」那判官慌忙捧筆，飽搥濃墨。	しかし、まあ、いいや。寿命をたとえもう千年のぼしてもらったところで、千年は一瞬にしてすぎてしまう。それよりいっそのこと俺の名前を消してしまえ」彼は書記に筆を持って来いと命じた。
悟空拿過簿子，把猴屬之類，但有名者，一概勾之。	そして、名簿を開くと、およそ有名な猿の名前は片ッぱしから消して行った。
掙下簿子道：「了帳，了帳，今番不伏你管了。」一路棒，打出幽冥界。	「さあ、これでご破算だ」生死簿を投げ出すと、悟空はまた如意棒を片手に悠々と幽冥界を引きあげた。
那十王不敢相近，都去翠雲宮，同拜地藏王菩薩，商量啟表，奏聞上天，不在話下。	
這猴王打出城中，忽然絆著一個草紇縫，跌了個躑踵，猛的醒來，乃是南柯一夢。	城門を出て暫く行くと、孫悟空は草叢に足をとられて思わずひっころんだ。「あッ」と叫んだ途端に夢から醒めた。
才覺伸腰，只聞得四健將與眾猴高叫道：「大王，吃了多少酒，睡這一夜，還不醒	ほッとして眼をあけると、まわりには元帥大将がとりかこんでいる。「あまりお酒を召し上がりすぎたせいでしょう

<p>來？」</p>	<p>か、ずいぶんよくお休みになりましたね」と猿どもがい った。</p>
<p>悟空道：「睡還小可，我夢見兩個人來此勾 我，把我帶到幽冥界城門之外，卻才醒 悟。是我顯神通，直嚷到森羅殿，與那十 王爭吵，將我們的生死簿子看了，但我等 名號，俱是我勾了，都不伏那廝所轄 也。」</p>	<p>「俺は惰眠を貪っていたわけではない」と悟空はつぶやい た。「ねている間に冥土へ行って、ちょっと他流試合をや って来たんだ。これであの世の奴らも俺がどんな男か少し は認識しただろう」</p>
<p>眾猴磕頭禮謝。自此，山猴多有不老者， 以陰司無名故也。</p>	<p>孫悟空のこの暴挙によって、猿の中には年をとってもなか なか死なない者が現われるようになった。</p>
	<p>猿の間に敬老思想がはびこるようになったのはこの時に 始まる。それ以前は、年齢に関係なくもっぱら実力が物 をいう世界であったのだが。</p>
<p>美猴王言畢前事，四健將報知各洞妖王， 都來賀喜。不幾日，六個義兄弟又來拜 賀，一聞銷名之故，又個個歡喜，每日聚 樂不題。</p>	
<p>卻表啟那個高天上聖大慈仁者玉皇大天尊 玄穹高上帝，一日駕坐金闕雲宮靈霄寶 殿，聚集文武仙卿早朝之際，忽有丘弘濟 真人啟奏道：「萬歲，通明殿外有東海龍王 敖廣進表，聽天尊宣詔。」玉皇傳旨：「著 宣來。」敖廣宣至靈霄殿下，禮拜畢，傍 有引奏仙童送上表文。</p>	<p>さて、ユスられて泣き寝入りをするのは人間世界の話 で、天には天の道がある。東海竜王は不平やるかたなく、 遂に孫悟空を告訴する決意をし、告訴状を起草する と、それを持って、玉皇上帝の起居する金闕雲宮へ出かけ て行った。彼はまず侍従長の邱弘濟真人に面会を求め、 これまでの経過を話し、告訴状を手渡した。侍従長がそ れを宮殿にとりついだ。</p>
<p>玉皇從頭看過。</p>	<p>玉帝が御みずから告訴状を開いて見ると、</p>
<p>表曰：「水元下界東勝神州東海小龍臣敖廣 啟奏大天聖主玄穹高上帝君：近因花果山 生、水簾洞住妖仙孫悟空者，欺虐小龍， 強坐水宅，索兵器，施法施威；要披掛， 騎兇騎勢。驚傷水族，誑走龜鼈。南海龍 戰戰兢兢，西海龍悽悽慘慘，北海龍縮首 歸降。臣敖廣舒身下拜，獻神珍之鐵棒， 鳳翅之金冠，與那鎖子甲、步雲履，以禮 送出。他仍弄武藝，顯神通，但云：『聒 噪！聒噪！』果然無敵，甚為難制。臣今 啟奏，伏望聖裁。懇乞天兵，收此妖孽， 庶使海嶽清寧，下元安泰。奉奏。」</p>	<p>それには孫悟空が東洋大海へ下りてユスりを働いた一部 始終が事細かにしたためられている。如意棒を強要し、 鎧兜を強奪し、拳句の果てにどうもお騒がせ致しましたと いったと書いてあるのを見て、玉帝は思わず失笑した。</p>

	「東海竜王はどこにいる？」と玉帝はきかれた。「只今、通明殿のそとにかしこまっております」
聖帝覽畢，傳旨：「著龍神回海，朕即遣將擒拿。」	「すぐ海へもどるようにいいなさい。不届者の猿はこちらで退治させるから」
老龍王頓首謝去。	竜王が帰ると、
下面又有葛仙翁天師啟奏道：	入れ違いに今度は葛仙翁天師が御殿に進み出て、
「萬歲，有冥司秦廣王賚奉幽冥教主地藏王菩薩表文進上。」	「恐れながら冥界を司る地藏王菩薩から訴えが参っております」
	「ほオ、珍しいこともあるものだな」
傍有傳言玉女接上表文。玉皇亦從頭看過。	地藏菩薩の告訴状を開いて見ると、
表曰：「幽冥境界，乃地之陰司。天有神而地有鬼，陰陽輪轉；禽有生而獸有死，反復雌雄。生生化化，孕女成男，此自然之數，不能易也。今有花果山水簾洞天產妖猴孫悟空，逞惡行兇，不服拘喚。弄神通，打絕九幽鬼使；恃勢力，驚傷十代慈王。大鬧森羅，強銷名號。致使猴屬之類無拘，獼猴之畜多壽；寂滅輪迴，各無生死。貧僧具表，冒瀆天威。伏乞調遣神兵，收降此妖，整理陰陽，永安地府。謹奏。」	またしても孫悟空の暴状である。
玉皇覽畢，傳旨：「着冥君回歸地府，朕即遣將擒拿。」	「よしよし、委細は承知したから、使いの者を帰らせなさい」
秦廣王亦頓首謝去。	
大天尊宣眾文武仙卿，問曰：「這妖猴是幾年產育，何代出身，卻就這般有道？」	玉帝は告訴状を下げさせると、居並ぶ文武百官に向って、「孫悟空とやらいう妖猴の素性を知っている者がいるか？」ときかれた。
一言未已，班中閃出千里眼、順風耳道：「這猴乃三百年前天產石猴。當時不以為然，不知這幾年在何方修煉成仙，降龍伏虎，強銷死籍也。」	千里眼と順風耳が進み出て、「この猿は三百年前に花果山の頂上に聳えている石の中から生まれた猿でございます。あの時は大したことはなかりうと思っておりましたが、どこでどうやって修行をしたものか、遂に降竜伏虎の術を覚え、生死簿にまで墨を塗るようなシタタカ者になりました」
玉帝道：「那路神將下界收伏？」	「誰か下界に下りて、そやつを捕えてくる者はおらぬか？」
言未已，班中閃出太白長庚星，俯伏啟奏道：「上聖，三界中凡有九竅者，皆可修	玉帝の言葉が終るか終らないうちに、太白金星が御前に罷り出て、「恐れながら申し上げます。およそ三界の中で

<p>仙。奈此猴乃天地育成之體，日月孕就之身，他也頂天履地，服露餐霞，今既修成仙道，有降龍伏虎之能，與人何以異哉？臣啟陛下，可念生化之慈恩，降一道招安聖旨，把他宣來上界，授他一個大小官職，與他籍名在籙，拘束此間。若受天命，後再陞賞；若違天命，就此擒拿。一則不動眾勞師，二則收仙有道也。」</p>	<p>身体に九つの穴を持った者は皆仙人になる資格を持っています。あの猿にしても天地日月のはぐくみ育てた者に相違なく、頭は天をいただき、脚は大地をふまえ、人間と何ほどの距離がございましょう。ことに露を飲み霞を食って仙術を会得した今日となつては、差別待遇をするのはいかがかと存じます。この際、いっそ彼を上界に招致して、適当な官職を与え、天禄を与えてやってはいかがでございましょうか。もし天命にたがわなければ、さらに昇進させればよいし、万一従わなければ、その時になってから処罰しても遅くはないでしょう。そうすれば、まず第一に兵を起さないですむし、第二に能力のある者に所を得しめるし、まさに一石二鳥の妙案かと存じます」</p>
<p>玉帝聞言甚喜，道：「依卿所奏。」</p>	<p>「そうだ。それがいい」と玉帝は常になく喜ばれた。</p>
	<p>べこべこと頭をさげて、おひげの塵を払っているのも出世の方法に違いはないが、謀叛を起すのも確かに一つの道ではある。ただし、これは相手が玉皇上帝のような宏遠無涯の大度量を持っている場合にのみ有効であって、ドングリ同士の喧嘩にはもちろん通用しない。</p>
<p>即著文曲星官修詔，著太白金星招安。</p>	
<p>金星領了旨，出南天門外，按下祥雲，直至花果山水簾洞，對眾小猴道：「我乃天差天使，有聖旨在此，請你大王上界。快快報知。」</p>	<p>太白金星は玉帝から意を授けられると、南天門を出、祥雲に乗って一路、花果山水簾洞へと向った。洞前に下りると、金星は小猿どもに向って言った。「私は天から来た特命全權大使だ。お前たちの大王を迎えに来たのだから、その旨、お取りつぎを願いたい」</p>
<p>洞外小猴一層層傳至洞天深處，道：「大王，外面有一老人，背著一角文書，言是上天差來的天使，有聖旨請你也。」</p>	<p>小猿が奥に駈け込んで要件を伝えると、</p>
<p>美猴王聽得大喜，道：「我這兩日正思量要上天走走，卻就有天使來請。」叫：「快請進來。」</p>	<p>悟空はすっかり喜んで、「ちょうどいいところへ来てくれた。この一兩日、退屈して、ひとつ天界にでも暴れ込んでやろうかと思っていたところだ」</p>
<p>猴王急整衣冠，門外迎接。</p>	<p>急いで正装をこらし、加冠束帯、部下を連れて門を出ると</p>
<p>金星徑入當中，面南立定道：「我是西方太白金星，奉玉帝招安聖旨，下界請你上天，拜受仙籙。」</p>	<p>門前に一人の老人が立っている。「私は西方の太白金星です。玉帝の聖旨を持って、あなたを迎えに参りました」</p>

悟空笑道：「多感老星降臨。」	「ようこそおいで下さいました」
教小的們安排筵宴款待。	うやうやしく聖旨を受けると、悟空は皆の者をかえりみて、「さあ、急いで宴会の用意をせよ。葡萄酒も料理も一番上等の分を出すんだぞ」
金星道：「聖旨在身，不敢久留。」	「いやいや、ご心配なく」と金星は手で制しながら、「私は使命を帯びている身ですから、長く留まっているわけには参りません」
	「まあ、いいじゃありませんか。ちょつと道草を食ってもいけないほど、天界は不自由なところなんですか？」なるほど聞きしにまさる不逞な猿だわい。天の動きにまでいちいちケチをつけるとは！と太白金星は思った。しかし、日の暮れる前に急いで戻らないとならないことは事実だったので、
就請大王同往，待榮遷之後，再從容敘也。」	「すぐ私と一緒に来て下さい。酒をのむのはまたの日に致しましょう」
悟空道：「承光顧，空退，空退。」	「せっかく御馳走の用意をしたのに、酒の一杯もひっかけないでおかえりになるとは、話せないお客だな」
即喚四健將，吩咐：「謹慎教演兒孫，待我上天去看看路，卻好帶你們上去同居住也。」四健將領諾。	ぶつぶつ言いながらも、孫悟空は家臣どもに向って、「では俺はこれから天に行ってくるから、お前たちはおとなしく待っているんだぞ。天界の方が住み心地がよいようなら、またお前たちを迎えに帰って来るからな」
這猴王與金星縱起雲頭，昇在空霄之上。	一同の見送るなかを、孫悟空と太白金星は雲に乗り、あっという間に見えなくなってしまったのである。
正是那：高遷上品天仙位，名列雲班寶籙中。畢竟不知授個甚麼官爵，且聽下回分解。	